論　文

明治後期三等郵便局の局員構成
―三島郵便局の事例―

磯部　孝明

1 はじめに

近年、郵便史研究において、郵便局の経営に関する研究が進められている。そこでは、主に郵便局長を中心に検討が進められており、郵便局の局員についての研究は少ない(1)。その中で大島藤太郎氏の研究(2)は、三等郵便局員の労働環境が劣悪であること、それに比して給与の低いことを明らかにする貴重な研究である。ただし、労働者の実態を明らかにしている部分は戦後の史料を使用している。そこで本稿では静岡県の三島郵便局を事例に、郵便局の局員構成について、勤務年数・年齢、住所・続柄、学歴・職歴、給与の４点から明らかにしていきたい。これによって、その地域の郵便局がどのように捉えられていたかを労働の問題から言及できると考える。なお、史料の残存状況から、時期は明治19年（1886）から同42年（1910）を中心に、局員は内勤業務の者（詳しくは後述）を中心に話を進める。

2 三島郵便局の沿革

ここでは、三島郵便局がどのような郵便局であるかを簡単に触れておきたい。まず静岡県の三島宿についてであるが、三島宿は東海道の宿場として、江戸時代から栄えていた。当初幕府領であったが、明治元年（1868）韮山県、同４年（1871）足柄県を経て、同９年（1876）静岡県に所属した。明治22年（1889）市制・町村制施行により三島宿は三島町となった。明治３年（1870）の石高は2103石余、戸数1,074戸、人口4,636人（男2,174人、女2,462人）であり、同24年（1891）の戸数1,516戸、人口8,750人、同44年（1911）の戸数1,998戸、人口11,536人であった。

三島郵便局は、明治４年３月の郵便創業の際、伝馬所に取扱所が置かれたのが始まりである（**表１**参照）。明治８年（1875）に為替、同12年（1879）に貯金、同24年に電信、同41年（1908）に電話交換業務を開始している。局長は、山口氏から渡辺氏へと代わり、明治19年（1886）に渡辺寿太郎が局長となっている。彼は、大正11年（1922）に亡くなるまで、30年以上にわたって郵便局長を務め続けた。

このような変遷をたどる三島郵便局は、どの程度の規模であったのだろうか。明治12年時点での郵便物の年間発信数を**表２**にまとめた。静岡県内では、静岡郵便局が群を抜いて取扱数が多く、三島郵便局は県内６位となっている。また、三島郵便局の郵便物取扱数を**表３**にまとめた。今回取り扱う明治後半期は、郵便の取扱数が急激に増加していることが明らかとなる。

1　野上敏夫『備前西特定局長会史』（備前西地区特定郵便局長会、1997年）では、三等郵便局の労働条件（169～185頁）を取り上げ、その問題点を指摘している。ただし、明治後半期における法令やの雑誌『交通』の記事をまとめるにとどまり、郵便局の史料を使用した分析はない。

2　大島藤太郎『封建的労働組織の研究―交通・通信業における―』（御茶の水書房、1961年）。

以上述べてきたように、三島郵便局は、東海道の宿場という立地から重要な業務をいち早く開始しており、また静岡県内でも郵便取扱量が多かったのである。こうした点から、三島郵便局はこの地域の中心的な役割を果たしていたといえよう。

年　月　日	事　　項
明治４年３月１日	三島宿御伝馬所にて三島飛脚取扱所開設、取扱役は特に置かれず。
明治５年９月３日	山口余一が自宅での郵便取扱を足柄県より命ぜられる。
明治６年４月５日	三島４等郵便役所と改称。山口佐左衛門（余一の息子）が７等郵便取扱役を命ぜられる。
明治８年１月１日	三島郵便局と改称。
明治８年11月３日	為替業務開始。
明治９年５月１日	山口佐左衛門が４等郵便取扱役を命ぜられる。
明治９年10月11日	渡辺佐平次（余一の義理の叔父）が４等郵便取扱役を命ぜられる。それに伴い、三島郵便局は渡辺佐平次の自宅（三島宿大中島町181番地）に移転。
明治12年２月１日	貯金業務開始。
明治13年11月９日	渡辺佐平次が３等郵便取扱役を命ぜられる。三島郵便局は３等郵便局となる。
明治19年６月12日	渡辺寿太郎（佐平次の息子）が３等郵便局長を命ぜられる。
明治24年３月16日	三島郵便電信局と改称。電信業務開始。
明治36年４月１日	三島郵便局と改称。
明治41年８月１日	電話交換業務開始。
大正11年11月16日	三島郵便局は三島市久保町1496に局舎新築移転し、２等郵便局となる。今までの郵便局は三島大中島郵便局となる。

出典：郵政資料館所蔵文書GD-B14（明治）「三島郵便局原簿」、『三島市史　中巻』318～322頁、『三島市史　増補資料編Ⅰ』476、483、497頁より作成

表１　三島郵便局の沿革

局名	等級	年間発信数（通）	順位
静岡	2	279,955	1
掛川	3	79,139	2
浜松	2	73,799	3
沼津	4	64,597	4
藤枝	4	64,165	5
三島	4	43,250	6
清水	4	22,665	7
見付	4	20,648	8
江尻	4	19,682	9
下田	4	18,767	10
熱海	4	18,421	11
吉原	4	15,008	12
韮山	4	11,716	13
島田	4	10,978	14
森町	4	10,073	15

出典：『静岡県史』通史編５近現代１（静岡県、1996年）165頁

表２　静岡県内主要郵便局における年間郵便発信数（明治12年（1879））

年　　次	引受（通）	配達（通）
明治19年度	82,613	91,748
明治20年度	93,732	108,520
明治21年度	105,123	119,678
明治22年度	105,139	133,813
明治23年度	111,125	139,472
明治24年度	133,426	178,559
明治25年度	151,071	195,469
明治26年度	184,675	226,777
明治27年度	187,978	244,469
明治28年度	197,229	268,298
明治29年度	248,186	324,753
明治30年度	275,505	351,590
明治31年度	298,379	363,640
明治32年度	330,303	434,130
明治33年度	402,321	550,350
明治34年度	499,859	720,656
明治35年度	504,280	725,648
明治36年度	536,552	758,256
明治37年度	588,396	742,158
明治38年度	917,293	905,003
明治39年度	735,346	852,352
明治40年度	711,559	1,004,237
明治41年度	681,443	810,604
明治42年度	632,110	854,981

出典：郵政資料館所蔵2941-25「郵便物計算書」より一部抜粋

表３　三島郵便局通常郵便取扱数

❸ 三島郵便局局員の構成

それでは、三島郵便局の局員構成について見ていきたい。使用する史料は、郵政資料館所蔵GD-B27（明治31年）三島郵便電信局局員現在調、同GD-B33（明治39年）「三島郵便局所属員給料諸手当支払簿」、同GD-B35（明治）「逓送人原簿」、同GD-B36（明治）「三島郵便電信局解免事務員原簿及履歴書保証書」、同GD-B37（明治）「三島郵便電信局雇員原簿」の５点である。それぞれ性格の違う史料であり、必ずしも全ての局員が明らかになるわけではない。特に、これから検討する住所や学歴が判明するのは逓送人・集配人を除く、いわゆる内勤の局員のみであることをお断りしておく。

⑴ 勤務年数、年齢

まず、全体像を**表４**に示した。この表の内、A欄・B欄の数字がそれぞれの局員を示す[3]。A欄は、局員を服務順に並べたもので、ここから合計105名の局員がいたことが判明する。B欄は、局員の中で住所や学歴・職歴など詳細が明らかになることを示している。この点については後述するので、ここでは省略する。また、表の○はその時点で勤務していたことを示し、●はこの時期以降も勤務し続けていたことを示す。そして、服務欄は郵便局内での仕事内容、年齢欄は勤務開始時の年齢を示している。

さて、**表４**から明らかになることを挙げてみたい。まず勤務開始時の年齢と服務との関係を**表５**に示した。残念ながら、年齢が明らかになる局員は半分に満たない46名である。しかし、この46名中、約４割が20歳未満であり、特に電話業務ではほぼ全てがあてはまる。逆に25歳以上の採用は、46名中12名であり３割に満たない。このことから、明治後期における三島郵便局の局員は比較的若者が多いことがうかがえる。このことは、郵便業務（内勤）に限っても同じ傾向が読み取れるのである。外勤である逓送人・集配人についてはほとんど明らかにできなかったが、勤務内容[4]を考えればやはり若者を採用したのではないかと考えられる。次に、勤務年数と勤務開始時の年齢の関係を**表６**に示した。ここでは便宜的に、勤務年数を５年以上・１年以上～５年未満・１年未満・１年以上のみ確定[5]という段階に分けた。全体の局員から勤務年数不明分を除くと81名となり、５年以上勤務する者は19名、１年未満で勤務を終えるものは26名となっている。これらのことから、郵便局員は勤務年数が５年未満と短い者が多い傾向にあることがいえる。また、年齢の若い者のほうが、勤務年数が短いということもいえよう。

⑵ 住所・続柄

さて次に、局員の住所やその家での続柄を見ていきたい。ここでは、郵便局に勤務する局員はどこから来ていて、家庭内においてどのような地位にある者なのかを分析する。これら詳細が明らかとなる局員は44名であり、それをまとめたものが**表７**である。この内B欄は、前述した**表４**のB欄の数字に対応するものである。**表７**においては、生年月日順に並べてある。本籍

3　個人情報保護の観点から、局員の氏名は省略した。ただし、論旨の関係から本文中で紹介する人名は除く。

4　逓送は他の郵便局へ郵便物を運ぶことであり、集配は自局管轄区内の郵便物を集配することである。これらの業務は全て男性が行っていた。また逆に、電話業務は全て女性が行っていた。今回端的に示す表の作成を省略したが、表４と後述する表７からそのことが明らかとなる。

5　１年以上のみ確定とは、１年以上勤務していることは明らかであるが、勤務を終えた時期が不明なことを示すものである。そのため、５年以上勤務したものも含まれる可能性があることをお断りしておく。

A	B	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	服　務	年齢
1	12																	○	○	○	○	○	○	○	●	局長代理	21
2	4	○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				電信、郵便	15
3	1					○	○	○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				郵便	41
4	3													○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			郵便	33
5	10															○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	郵便	21
6	7																○	○	○	○	○	○	○	○		郵便兼務予備員	24
7	8																○			○	○	○				郵便	24
8	11																	○	○	○	○	○	○	○	●	郵便	22
9	2																		○	○	○	○	○	○	●	郵便	39
10	15																		○	○	○	○	○	○		郵便	22
11	13																			○	○	○				郵便	23
12	25																							○	○	郵便	19
13	28																				○	○	○	○	●	郵便兼電信	15
14	29																					○	○	○		郵便	16
15	36																						○	○	●	郵便	15
16	18																						○	○	●	郵便	23
17	―																							○		郵便	22
18	32																							○		郵便	18
19	20																							○		郵便	22
20	14																							○		郵便	27
21	26																							○	○	郵便	19
22	21																							○	●	郵便	22
23	27																								○	郵便	20
24	33																								○	郵便	18
25	16																								●	郵便	26
26	34																								○	郵便	18
27	―																								●	郵便	不明
28	―																								●	郵便	不明
29	24																					○	○	○		為替貯金事務	17
30	9												○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	電信	19
31	―																○	○	○	○	○	○	○	○	●	電信	25
32	22																							○	○	電信	21
33	17																							○		電信	25
34	35																							○	○	電話	17
35	37																							○	○	電話	15
36	41																							○	●	電話	14
37	38																							○	●	電話	15
38	30																							○	●	電話	18
39	31																								○	電話	19
40	40																									電話	不明
41	―										○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	逓送人	24
42	―											○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		逓送人	35
43	―												○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	逓送人	不明
44	―													○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	逓送兼集配人	不明
45	―															○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	逓送人	36
46	―															○										逓送人	不明
47	―															○	○	○								逓送人	不明
48	―															○	○	○								逓送人	不明
49	―																	○	○	○	○	○	○	○	●	逓送人	46
50	―																	○								逓送人	不明
51	―																	○								逓送人	不明
52	―																	○	○	○	○					逓送兼集配人	不明
53	―																	○	○	○	○					逓送人	不明
54	―																			○	○	○				逓送人	不明
55	―																				○					逓送人	不明

表４　三島郵便局局員変遷表（明治19年～42年）

A	B	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	服　務	年齢
56	―																							○		逓送人	不明
57	―																							○	●	逓送人	30
58	―													○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	集配人	不明
59	―																					○	○	○	●	集配人	不明
60	―																					○	○	○	●	集配人	不明
61	―																					○	○	○	●	集配人	不明
62	―																					○	○	○	○	集配人	不明
63	―																						○	○	●	集配人	不明
64	―																							○		集配人	不明
65	―																							○	○	集配人	不明
66	―																							○	○	集配人	不明
67	―																							○	○	集配人	不明
68	―																							○	●	集配人	不明
69	―																							○	●	集配人	不明
70	―																								●	集配人	不明
71	―																								●	集配人	不明
72	―																								●	集配人	不明
73	―																								●	集配人	不明
74	―																								●	集配人	不明
75	―																								●	集配人	不明
76	―									○	○	○	○	○	○	○										不明	不明
77	―												○	○	○	○										不明	不明
78	―												○	○	○	○										不明	不明
79	―												○	○												不明	不明
80	―												○	○												不明	不明
81	―													○												不明	不明
82	―													○	○	○										不明	不明
83	―													○	○	○										不明	不明
84	―														○	○										不明	不明
85	―															?										不明	不明
86	―															○										不明	不明
87	―															?										不明	不明
88	―															○	○									不明	不明
89	―															○	○									不明	不明
90	―															○	○									不明	不明
91	―															?										不明	不明
92	―																?									不明	不明
93	―																○									不明	不明
94	―																?									不明	不明
95	―																?									不明	不明
96	19																					○	○	○		不明	22
97	―																						○	○	●	不明	不明
98	―																						○	○	●	不明	不明
99	5																								●	不明	35
100	39																									不明	不明
101	43																									不明	不明
102	6																									不明	不明
103	44																									不明	不明
104	42																									不明	不明
105	23																									不明	不明

凡例：局員の氏名は省略した。Aは服務順、Bは住所や学歴など詳細な情報が判明する局員で、他の表と照合可能。○はその年に勤務していたことが判明する者、●は明治42年以降も勤務していたことが判明する者、？は採用・退職月日が不明な者。

出典：郵政資料館所蔵GD-B27（明治31年）三島郵便電信局局員現在調、同GD-B33（明治39年）「三島郵便局所属員給料諸手当支払簿」、同GD-B35（明治）「逓送人原簿」、同GD-B36（明治）「三島郵便電信局解免事務員原簿及履歴書保証書」、同GD-B37（明治）「三島郵便電信局雇員原簿」より作成

服務 / 年齢(歳)	郵便			郵便小計	電信	電話	不明	合計	割合
	事務	逓送	集配						
40以上	1	1	0	2	0	0	0	2	1.8%
35～39	1	2	0	3	0	0	1	4	3.7%
30～34	1	1	0	2	0	0	0	2	1.8%
25～29	2	0	0	2	2	0	0	4	3.7%
20～24	12	1	0	13	1	0	1	15	13.8%
15～19	10	0	0	10	3	5	0	18	16.5%
14未満	0	0	0	0	0	1	0	1	0.9%
不明	2	12	20	34	0	1	28	63	57.8%
合計	29	17	20	66	6	7	30	109	100.0%

※兼務を含むため合計人数は多くなっている
出典：郵政資料館所蔵GD-B33（明治39年）「三島郵便局所属員給料諸手当支払簿」、同GD-B35（明治）「逓送人原簿」、同GD-B36（明治）「三島郵便電信局解免事務員原簿及履歴書保証書」、同GD-B37（明治）「三島郵便電信局雇員原簿」より作成

表５　勤務開始時の年齢

年数 / 年齢(歳)	５年以上	１年～５年未満	１年未満	１年以上のみ確定	不明	合計
40以上	2	0	0	0	0	2
35～39	3	0	0	0	1	4
30～34	1	0	0	1	0	2
25～29	1	0	2	0	1	4
20～24	6	3	4	2	0	15
15～19	3	3	7	3	1	17
14未満	0	0	0	1	0	1
不明	3	15	13	8	21	60
合計	19	21	26	15	24	105

出典：郵政資料館所蔵GD-B33（明治39年）「三島郵便局所属員給料諸手当支払簿」、同GD-B35（明治）「逓送人原簿」、同GD-B36（明治）「三島郵便電信局解免事務員原簿及履歴書保証書」、同GD-B37（明治）「三島郵便電信局雇員原簿」より作成

表６　勤務年数と年齢の相関関係表

欄はその局員の本籍を、現住欄は勤務時点での現住所を町村単位で示した。そして肩書欄は勤務開始時においての局員の肩書きを、服務欄は**表４**と同じように具体的な仕事内容を示している。まず住所、特に現住に注目したものを**表８**にまとめた。ここから、やはり局員は三島郵便局のある三島町に多く住んでいることが明らかとなる。ただし、三島町に隣接している村から勤務しているものもいる。隣接していない遠方の者は、そこから勤務しているのか、それとも三島町に寄留しているのか、残念ながら明らかとはならない。次に局員の続柄に注目したものを**表９**にまとめた。ここから、郵便局員が戸主本人であることは少なく、戸主の子供であることが多いことがいえる。子供はつまり若者であり、これは（１）勤務年数・年齢のところで明らかにした、郵便局員は比較的若者が多いという傾向と一致する。また、次男以下も多く見られ、家の口減らしのために働きに出された可能性も考えられる。

⑶　学歴・職歴

つづいて、局員の学歴や職歴を見ていきたい。それらについてまとめたものが**表10**である。

B	生年月日	本　　籍	現住	続柄	肩　　書	服　　務
1	嘉永元年10月18日	駿東郡沼津町本町	三島	戸主	不明	不明
2	元治元年２月５日	田方郡三島町	三島	不明	通信事務員	郵便
3	慶応元年４月８日	田方郡三島町	三島	不明	通信事務員	不明
4	明治４年３月20日	駿東郡小泉村富沢	小泉	養子	通信技術員謙代理事務員	電信兼郵便
5	明治６年１月20日	田方郡中郷村新谷	中郷	不明	通信事務員	不明
6	明治７年２月５日	田方郡三島町	三島	戸主	不明	不明
7	明治10年３月７日	駿東郡清水村堂庭	清水	養子	通信事務員	郵便兼務予備員
8	明治10年９月４日	田方郡三島町	三島	不明	通信事務員	不明
9	明治11年11月１日	田方郡三島町	三島	長男	予備技術員	電信
10	明治12年11月	田方郡中郷村青木	中郷	不明	通信事務員	郵便
11	明治13年４月	駿東郡長泉村竹原	長泉	長男	通信事務員	郵便
12	明治14年１月15日	駿東郡清水村戸田	清水	不明	不明	局長代理
13	明治14年９月	田方郡錦田村谷田	錦田	不明	通信事務員	郵便
14	明治14年10月28日	富士郡吉原町	吉原	不明	事務員	郵便
15	明治14年12月	駿東郡長泉村竹原	三島	不明	通信事務員	郵便
16	明治16年３月	田方郡田中村三福	田中	叔父	通信事務員	不明
17	明治16年５月	神奈川県三浦郡葉山村堀内	不明	長男	事務員	電信
18	明治17年８月23日	田方郡三島町	三島	戸主	通信事務員	郵便事務
19	明治17年11月日	田方郡中郷村平田	中郷	不明	通信事務員	
20	明治19年６月８日	田方郡錦田村谷田	錦田	戸主	事務員	郵便
21	明治19年９月11日	田方郡函南村塚本	函南	弟	不明	郵便
22	明治20年７月15日	田方郡熱海町大字熱海	熱海	不明	事務員	電信
23	明治21年２月17日	田方郡三島町	三島	戸主	不明	不明
24	明治22年１月15日	浜名郡白脇村三島	沼津	長女	通信事務員	為替貯金事務
25	明治22年６月	駿東郡清水村長沢	清水	不明	通信事務員	郵便
26	明治22年８月15日	駿東郡小泉村久根	深良	長男	不明	郵便
27	明治22年８月	駿東郡楊原村下香貫	楊原	四男	通信事務員	郵便
28	明治23年２月20日	田方郡三島町	三島	長男	通信事務員	郵便并電信
29	明治23年２月21日	駿東郡富士岡村竈	富士岡	次男	通信事務員	郵便
30	明治23年４月23日	田方郡三島町	三島	三女	通信事務員	電話
31	明治23年10月１日	駿東郡清水村堂庭	清水	長女	通信事務員	電話
32	明治23年12月23日	田方郡中郷村青木	中郷	次男	事務員	郵便
33	明治24年１月１日	田方郡三島町	三島	不明	通信事務員	郵便
34	明治24年３月６日	田方郡北上村徳倉	北上	次男	通信事務員	郵便
35	明治24年７月４日	鹿児島県□□□市新町	三島	長女	事務員	電話
36	明治25年４月23日	田方郡三島町小中島	三島	三男	通信事務員	郵便
37	明治26年１月３日	駿東郡清水村柿田	清水	四女	事務員	電話
38	明治26年４月30日	田方郡三島町茶	三島	次女	通信事務員	電話
39	明治26年６月７日	田方郡三島町	三島	次男	不明	不明
40	明治27年１月８日	鳥取県東伯郡倉吉町字東仲町	不明	妹	不明	電話
41	明治27年７月９日	駿東郡清水村伏見	清水	三女	事務員	電話
42	明治28年６月17日	田方郡三島町	三島	弟	不明	不明
43	明治28年８月23日	田方郡三島町	三島	長女	不明	不明
44	明治30年３月19日	田方郡三島二日町	三島	長男	不明	不明

出典：郵政資料館所蔵GD-B27（明治31年）「三島郵便電信局局員現在調」、同GD-B33（明治39年）「三島郵便局所属員給料諸手当支払簿」、同GD-B35（明治）「逓送人原簿」、同GD-B36（明治）「三島郵便電信局解免事務員原簿及履歴書保証書」、同GD-B37（明治）「三島郵便電信局雇員原簿」より作成

表７　三島郵便局局員住所ほか一覧表

郡名	町村名	人数
田方郡	三島町	19
駿東郡	清水村	6
田方郡	中郷村	4
田方郡	錦田村	2
田方郡	田中村	1
田方郡	函南村	1
田方郡	北上村	1
田方郡	熱海町	1
駿東郡	深良村	1
駿東郡	小泉村	1
駿東郡	長泉村	1
駿東郡	富士岡村	1
駿東郡	楊原村	1
駿東郡	沼津町	1
富士郡	吉原町	1
	不明	2
	合計	44

出典：表７の現住欄を集計

表８　局員居住地集計表

	男	女	合計
戸主本人	5	0	5
長男・長女	6	4	10
次男・次女	4	1	5
三男・三女	1	2	3
四男・四女	1	1	2
その他（弟・妹・養子など）	5	1	6
不　　明	13	0	13
合　　計	35	9	44

出典：表７の続柄欄を集計

表９　局員続柄集計表

学歴や職歴が明らかになる局員も、（２）住所・続柄と同じく44名であり、B欄の数字は共通している。学歴は、高等小学校を卒業したかどうか、その卒業年月、中学校を卒業したかどうか、その他特記事項の順で項目立てした。これを見ると、**表10**にあげられている44名中35名の局員が高等小学校に入学し、そのほとんどが卒業していることが明らかとなる。当時（明治39年（1906）まで）は尋常小学校４年が義務教育であり、その後高等小学校→中学校・師範学校・実業学校などへ進学する道があった。さらに中学校や実業学校などさらに上級の学歴を持つものは35名中25名にのぼる。ところで、この時期の全国的な小学校卒業者の進学状況は**表11**の通りとなっているが、この表から、尋常小学校を卒業しないものも３割おり、さらに高等小学校や中等学校へ進学するものは全国的に見てかなり少なかったことが明らかとなる。進学するには付近に学校があること、学費を納められるだけの経済力が必要であった(6)。このような状況下で、高等小学校を卒業している者がほとんどであり、さらに上級の学校へ進学しているものも多いということは、三島郵便局の局員は高学歴であったといえよう。またこのことは、郵便局に勤務できる者は、居住地の中で中上層に位置した、経済的に豊かな家の出身であることが考えられる。例えば、B欄27番の奈良橋庫三は、下香貫村の地主(7)の四男であることがその例である。また、電信業務に携わるために横浜電信郵便局へ伝習生として進学しているものも確認できる。

次に職歴をまとめた**表12**を見ると、以前郵便局員だったものが12人確認できる。**表10**において各地の郵便局へ、あるいは郵便局からの異動が見られるのは、横浜郵便電信局から転勤を命じられていたと考えられる。これは、明治26年（1893）から、横浜郵便電信局が１等局として

6　天野郁夫『教育と選抜の社会史』（筑摩書房、2006年、『教育と選抜』第一法規出版、1982年の再刊）
7　明治14年８月「不動産見立鏡」（森田家文書、沼津市明治史料館所蔵）は、下香貫村（のち楊原村となる）の土地所有者の番付表である。所有地の地価が高いものから並べられており、奈良橋庫三の父親である弥作は地価2100円と番付中５位に当たる。

B	学歴				職歴
	高等小学校	卒業年月	中学校	その他	
1				水野出羽侯の外儒西尾辞角の門に入る、所修の科目読書珠算作文習字	水野出羽侯の城下に町割の伍長をなし、町頭をなす、商業に従事す、三島駅伝取締所に傭書記を務む、商業に従事、三島郵便局傭勤務、辞職、商業に従事
2					任裁判所書記、補浜松区裁判所書記、補静岡区裁判所検事局書記、台湾総督府へ出向、任台湾総督府法院書記、補台南地方法院検察局書記、台南地方法院検察局鳳山出張所詰、台南地方法院検察局鳳山出張所監督書記、依願免本官
3	○	12年6月	○	静岡師範学校	
4	○	17年12月		静岡県士族吉原呼我に就き漢字修業、電気通信技術氏伝習生（静岡郵便電信局）	三島郵便局傭に採用、解雇、駿東郡佐野村外十二ヶ村戸長役場傭、筆生及会計掛勤務、三島郵便電信局傭、三島郵便電信局電気通信予備技術員
5					
6				伊勢神宮皇学館第2学年修了、病気退学	三島高等小学校教授、辞職、三島町株式会社伊豆銀行計算課および官庁課を勤務、辞職、三島町株式会社三島銀行計算課庶務課預金課等に勤務、都合上退職
7	○	18年		電気通信術伝習生	
8	○	25年3月			商
9	○	28年3月		電気通信技術伝習生（横浜郵便電信局）	横浜郵便電信局助手
10	○	26年3月			三島郵便電信局通信事務員
11					
12					
13	○	29年3月	○	東京神田区簿記精修学館卒業、埼玉県川越博仁堂病院に於て理科学薬剤学修業	錦田村役場書記、錦田村立尋常小学校代用教員、錦田村立塚原尋常小学校代用教員、錦田村役場雇書記
14	○	28年			商業に従事
15	○	28年		電気通信技術伝習生（横浜郵便電信局）	横浜局臨時通信助手、箱根郵便局通信技術兼務予備員
16	○	30年3月	1学年修了		大仁郵便局事務員、第3師団輜重兵大隊第22補助輜卒隊入営、三島乾燥株式会社事務員、辞職
17	○	31年3月		横浜長者郵便局養成所	三浦郡葉山村役場書記、養成所入学の為辞職、葉山郵便電信局へ採用、家事上の都合により辞職、武蔵溝の口郵便局に採用、横須賀局電信部へ転勤、病気のため辞職、相模□□郵便局へ採用、為替貯金事務に従事、病気のため辞職
18					
19	○	32年3月		予備歩兵中尉栗原賢雄氏に就き英語漢文数学及博物学を修む、中郷尋常小学校長薬剤士佐久間俊麿氏に就き物理化学及植物学を修む、薬学得業士奈良桓郎氏に従い薬物分析術衛生試験法動物学を修む	製薬業に従事
20	○	35年3月	2学年修了		静岡県田方郡伊東町伊東郵便局通信事務員

表10　局員履歴表-1

B	学歴				職歴
	高等小学校	卒業年月	中学校	その他	
21	○	35年３月	２学年修了		農業に従事、函南村役場勤務、横浜桜木郵便局勤務、吉原郵便局勤務、吉原郵便局郵便主任、都合上三島郵便局へ勤務
22				電気通信技術伝習生（横浜郵便電信局）	
23	○	35年３月	○	千葉県補習学校修了、明治大学予科退学	
24	２学年卒業	34年３月		駿東郡高等女学校３学年修了	沼津郵便局通信事務員、特定郵便局に改定の結果退職
25	○	35年３月			三島郵便局集配人
26	３学年修了	36年３月		佐野農業学校２学年編入、退学	深良村役場書記、免依願職務、佐野郵便局通信事務員（郵便主任兼現金）、局長代理
27	○	36年３月	○	電気通信技術伝習生（横浜郵便電信局）	
28					
29	○	35年３月		御殿場農業学校	農業に従事
30	２学年修了	35年３月		田方郡立三島高等女学校	
31	○	38年３月		（三島カ）高等女学校３学年編入、卒業	
32	○	38年３月		沼津商業学校	
33	○	38年３月		沼津商業学校甲種科	
34	○	39年３月		田方郡立農業学校	
35	○	38年３月		駿東郡高等女学校３学年修了	
36	○	40年３月			
37	○	41年３月			
38	○	41年３月			
39	○	41年３月			
40	○	41年３月			
41	○	41年３月			
42	○	43年３月			
43	○	43年３月			
44	○	44年３月			

凡例：○は正規の課程を修了したことを示す。
出典：郵政資料館所蔵GD-B27（明治31年）「三島郵便電信局局員現在調」、同GD-B33（明治39年）「三島郵便局所属員給料諸手当支払簿」、同GD-B35（明治）「逓送人原簿」、同GD-B36（明治）「三島郵便電信局解免事務員原簿及履歴書保証書」、同GD-B37（明治）「三島郵便電信局雇員原簿」より作成

表10　局員履歴表-2

神奈川県・静岡県内の郵便局を監督していたことによる(8)。また、前職が教員や官公吏（役場勤務が多い）のものも含めれば、公務員からの転職が多く、一般的な職業からの転職は少ない傾向にある。郵便業務に携わるには、ある程度の知識が求められたためと思われる。

(4)　給与

最後に局員の給与を見ておきたい。局員給与をまとめた**表13**では、明治39年から42年にかけ

8　横浜市役所編『横浜市史稿』政治編三（名著出版、1973年）490頁。

（単位：％）

		全体	男	女
尋常小学校入学者（明治38年）		100.0	100.0	100.0
尋常小学校卒業者（明治43年）		68.4	76.4	60.1
中等学校入学者（明治43年）	中学校	2.9	5.7	—
	高等女学校	1.5	—	3.2
	実業学校	2.7	5.3	—
	師範学校※	0.5	0.7	0.3
	小計	7.6	11.7	3.5
高等小学校入学者（明治43年）		30.1		

※第一部（高等小学校卒業が入学資格）のみ
出典：天野郁夫『教育と選抜の社会史』（筑摩書房、2006年）225頁、『文部省年報』各年度より）

表11　全国小学校卒業者の進学状況

職業	人数
郵便局員	12
官公吏	6
教員	3
農業	2
商業	3
一般企業ほか	4
小計	30
新卒	23
合計	53

※１人で複数の職業についた場合も回数に入れているため、合計人数は多くなっている。
出典：表４の職歴欄を集計

表12　局員職歴集計表

ての月給の推移が明らかとなる。この表からおおまかな金額を述べると、局長代理・逓送人（外勤）が１ヶ月に11円から17円程度、集配人（外勤）が６円から12円程度、郵便・電信（内勤）が６円から13円程度、電話（内勤）が５円から６円程度という形で、服務内容によって月給に差があることが明らかとなる。電話業務の月給が安いのは、女性が勤務しているせいであろうか。これらの月給を単純に年収として計算すると、局長代理・逓送人が132円から204円、集配人が72円から144円、郵便・電信が72円から156円、電話が60円から72円となり、その差はかなり大きいことがわかる。ここで、他の職業についても少し見て比較しておきたい。明治29年から30年にかけての他職業の賃金は、東京の土方人足が日給10銭から12銭（年収37円から44円）、洋服仕立職が全国平均約48銭（年収175円）、小作人の平均が１年で約50円となっている(9)。これらと比較すれば郵便局員は優遇されているように見えるが、明治40年代の小学校教員の平均月俸約16円（年収192円）、官立専門学校卒業者の初任給約30円（年収360円）と比べると安いものであった。さらに、例えば明治40年代に中学校で教育を受ける費用は、通学生の場合で月に約５円であった。また教育費には授業料だけでなく、生活費、さらには義務教育を終えるか、せいぜい高等小学校２年を終えれば就労するのが普通という時代に、20歳をすぎるまで働かないで勉強をすることから生じる「マイナスの所得」もふくめなければならない(10)。こういったことも含めて考えると、教育に投資した額に比べて局員になってからの給料はかなり安いといえよう。

4 おわりに

以上述べてきたことをまとめたい。

三島郵便局では、明治19年から同42年の間に、105名の局員を確認できた。その中で、（１）勤務年数・年齢では、年齢が明らかになる46名中約４割が20歳未満であり、25歳以上の採用は12名と３割に満たなかった。明治後期における郵便局においては、比較的若者が局員として採用されていたことが明らかとなった。勤務年数では、５年以上勤務するものは19名であり、５

9　東京の土方人足は明治31年２月、洋服仕立職の全国平均は明治29年、小作人の全国平均は明治29年の調査による（横山源之助『日本の下層社会』岩波書店、1949年、原典は明治31年）。

10　天野郁夫『学歴の社会史―教育と日本の近代―』（新潮選書、1992年）83頁。

服　務	番号	明　治　39　年												明　治　40　年											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
局長代理	B12	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12
郵　　便	B11																							5	9
郵　　便	B25																								
郵便兼電信	B28	6	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
郵　　便	B29																								
郵　　便	B36																							3	6
郵　　便	B18																					7	7	7	7
郵　　便	B21																								
郵　　便	B27																								
郵　　便	B33																								
郵　　便	B16																								
郵　　便	B34																								
郵　　便	A27																								
郵　　便	A28																								
電　　信	B22																								
電　　話	B38																								
電　　話	B30																								
電　　話	B31																								
電　　話	B41																								
逓 送 人	A41	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	13
逓送兼集配人	A44	10	10	10	10	11	11	11	10	11	11	11	11	11	10	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11
逓 送 人	A45	14	13	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	13	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14
逓 送 人	A49	12	11	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	11	12	12	12	12	12	12	12	12	12	13
逓 送 人	A57																								
集 配 人	A58	12	11	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	11	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12
集 配 人	A59	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	7	6	7	7	7	7	7	7	7	7	8	9
集 配 人	A60											7	7	7	6	7	7	7	7	7	7	7	7	8	9
集 配 人	A61											7	7	7	6	7	7	7	7	7	7	7	7	8	8
集 配 人	A62	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	7	7	6	7	7	7	7	7	7	7	7	8	9
集 配 人	A63																					8	8	8	8
集 配 人	A64																								
集 配 人	A67																								
集 配 人	A66																								
集 配 人	A65																								
集 配 人	A68																								
集 配 人	A69																								
集 配 人	A70																								
集 配 人	A71																								
集 配 人	A72																								
集 配 人	A73																								
集 配 人	A74																								
集 配 人	A75																								
不　　明	A97																7	7	7	7	7	7	7	7	7
不　　明	A98																				8	8	8	8	8
不　　明	B5																								

凡例：番号のA、Bは表４に対応している。表中の数字は１ヶ月あたりの給料（単位：円）を示す。
出典：郵政資料館所蔵GD-B33（明治39年）「三島郵便局所属員給料諸手当支払簿」

表13　局員給料変遷表

明治41年												明治42年												番号	服務
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
13	13	13	14	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	17	17	17	17	17	17	17	B12	局長代理
9	9	9	11	11	11	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	14	14	14	14	14	14	14	B11	郵便
7	7	7	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	3							B25	郵便
8	9	9	9	9	9	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	11	11	11	11	11	11	11	B28	郵便兼電信
																					10	10	10	B29	郵便
6	6	6	6	6	6	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	8	8	8	8	8	8	8	B36	郵便
7	7	7	9	9	9	9	9	9	9	9	9	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	B18	郵便
										9	9	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	B21	郵便
																1	6	6	6	4				B27	郵便
																		5	8	8	8	8		B33	郵便
																						2	12	B16	郵便
													1	6	3	6	6	7						B34	郵便
																					5	5	5	A27	郵便
																					5	5	5	A28	郵便
										6	12	13	13	13	13	13	13	13	13	13	5			B22	電信
												5	5	5	5	5	5	5	6	6	6	6	6	B38	電話
																	3	5	5	5	5	5	5	B30	電話
													0	5	5	5	5	5	5	5	5	6		B31	電話
							5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	6	6	6	6	6	6	6	B41	電話
13	12	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	12	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	A41	逓送人
11	10	11	11	11	11	12	12	11	12	11	12	12	11	12	11	12	11	12	12	11	12	11	12	A44	逓送兼集配人
14	13	14	14	14	14	15	15	14	15	14	15	15	13	15	14	15	14	15	15	14	15	14	15	A45	逓送人
13	12	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	12	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	A49	逓送人
						5	11	11	11	11	11	11	10	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	A57	逓送人
12	12	12	12	12	12	12	12	13	12	13	12	12	11	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	A58	集配人
9	8	9	8	9	8	9	9	9	9	9	9	9	8	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	A59	集配人
9	8	9	8	9	8	9	9	9	9	9	9	9	9	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	A60	集配人
8	7	8	8	8	8	9	9																	A61	集配人
9	8	9	8	9	8	9	9	9	9	9	9	9	9	10	9	10	9	10	5					A62	集配人
8	7	8	8	8	8	9	9	9	9	9	9	9	9	10	9	10	9	10	10	9	10	9	10	A63	集配人
		6	6	6	6	3																		A64	集配人
		6	6	6	6	7	7	7	7	7	7	7	6	7										A67	集配人
						4	8	8	8	8	8	8	7	8	8	8	8	8	9	8				A66	集配人
						4	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8					A65	集配人
9	8	9	8	9	8	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	A68	集配人
9	8	9	8	9	8	9	9	9	9	9	9	9	8	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	A69	集配人
															9	9	9	9	9	9	9	9	9	A70	集配人
																			10	9	10	9	10	A71	集配人
																			4	7	7	8	7	A72	集配人
																				7	7	7	7	A73	集配人
																				8	8	8	8	A74	集配人
																					7	6	7	A75	集配人
7	7	7	7	7	7	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	A97	不明
8	8	8	8	8	8	9	9	9	9	9	9	9	8	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	A98	不明
																			8	8	8	8	8	B5	不明

年未満で勤務を終えている者が多数派であったことを指摘した。（２）住所・続柄では、住所の判明する局員の半分が三島町に住んでおり、周辺村落から通勤する者より多いことが明らかとなった。また、続柄の分析から、局員は戸主よりもその子供が多く勤務していることを指摘した。（３）学歴・職歴では、学歴の判明する44名の内35名が高等小学校を卒業しており、高学歴であると共に、多少経済力に余裕のある家庭から内勤の局員として勤務していることを指摘した。また職歴を見ると、以前にも郵便局員であったものが12名おり、横浜郵便電信局による管理によって人材の異動があることを指摘した。また、教師や村吏などの公務員経験者が、郵便局の内勤局員に比較的多い傾向にあった。（４）給与では、逓送人の月給が高く、集配人や電話交換業務での月給が低いというように、郵便局内でどのような仕事をしているかで、給料に差が出ていることが明らかとなった。ただし、郵便局員は激務であり、また教育に投資した金額に比べてもらえる給料は少なかった。

これらのことを総合して考えると、次のことがいえる。①明治30年代以降、三島郵便局員は次第に増加していた。このことは郵便物取扱数との増加と深いかかわりがあると考えられる。②つまり、郵便物数の増加に対応して郵便局員の増員を図ったと考えられる。局員に比較的若者が多いのは、逓送や集配といった業務に耐えうる者を郵便局が必要としていたからであろう。しかし、戸主ではなくその子供が勤務することが中心であり、勤務期間が５年以下のものが多かった。その後は転勤しているのか、郵便局を退職した後に家業を継ぐなどしているのか不明である。③郵便局に勤務するには高等小学校卒業以上の学歴が必要と考えられ、当時の進学水準から考えると、郵便局員は周辺の村の中で経済力に余裕のある家庭がその供給源であろう。④三島郵便局に勤務する以前から、郵便局員として働いていたものも多く、郵便業務にはある程度の専門性が求められたと考えられる。これは、③で見たような、高学歴の局員が多いことからも指摘できよう。⑤月給は最高でも20円に満たず、専門性が求められた割には給料が安かったと考えられる。②で指摘したように、勤務年数が短い者が多かったのは、この点にも原因を求められる。三島郵便局の局員が、長男以下戸主でない者が多数派だった点も含めて考えれば、郵便局員は本業として勤めるものではなく、家業を継ぐまでのつなぎ、あるいは給料や社会的地位の高い職業に就くための踏み台としての役割があったと考えられるのではないだろうか。また、郵便局員の学歴がある程度高く、また前職に公共的な職業に就いていたことは、江戸時代において村役人層の子弟が他所において教育を施され、のちに村に戻り村役人としての業務を行っていたことと同じ構造ではないだろうか。郵便局員のその後の職業は明らかにできないため、まったく同じとはいえないものの、郵便局がそういった人々の受け皿として存在していたとも考えられるのである。労働の場という視点で捉えると、地域の人々にとって、郵便局とは以上のような存在であった。

本稿では、三島郵便局という１つの郵便局に焦点を絞って郵便局員について検討し、局員という労働者の側の視点からも郵便局を捉えることができることを指摘した。ただし、三島は江戸時代より東海道の宿場の一つとして栄えており、三等郵便局としては規模の大きい郵便局であったと考えられる。そのため、今後は他の郵便局についても検討し比較することで、本稿で取り扱った事例の普遍化を図っていきたい。また、郵便局員のその後の就職状況、外勤局員の学歴・職歴の検討、地域における局員の家の位置づけなどは、本稿では検討できなかった。今後の課題としたい。

（いそべ　たかあき　総合研究大学院大学　文化科学研究科日本歴史研究専攻）